地域の目

岡山県立岡山操山中学校　２年　廣田　昊之介

「おはよう、いってらっしゃい」

何気ない平日の朝、僕の町で響く声。この声の正体は、「セーフティーズ」と呼ばれる人たちだ。セーフティーズとは僕の町で、平日僕たち学生が登下校する時間帯に見回りをしてくれている人たちのことだ。雨の日はカッパを着て、寒い日には防寒着を着て、春夏秋冬どの季節のときでも、見回りをしてくれている。

このセーフティーズの方たちは、僕たち学生のみならず、大人にもあいさつをしている。そのあいさつをきっかけに、何か話を始める場面もよく見かける。僕にも、「今日の学校楽しかったか」と話しかけてくれたこともたくさんある。そこであいさつは、地域の人とのつながりを増やすのにとても有効なものなのではないかと僕は思った。そして、その地域の人とのつながりは地域内の防犯にとても大きく関わるのではないか。なぜなら、地域内の防犯には地域の人の目が必要不可欠だからだ。自分の身は自分で守るという風に小学校のころ教わった。「いかのおすし」という防犯標語はよく耳にすると思う。しかし、小中学生などに「いかのおすし」を果たすのは難しいと思う。僕が小学生だったころは、変質者に会っても走って逃げて、大声を出せば大丈夫だと思っていた。変質者に勝てると思っていた。しかし、中学生になり昔の自分を振り返ってみると、昔の自分が走って大人の変質者に勝てるとは到底思えないし、本当に変質者に会っても大声を出すことは恐らくできないだろう。そこで、地域の人の目が必要不可欠になってくるのだ。僕たち子供も、自分の身を自分で守るということは身につけなければならないが、やはり地域の人の目を借りざるを得ないのだ。小中学生はまだ、大人より力が弱く、大声を出すことも難しい場合が多い。そんな時に、僕の町にいる「セーフティーズ」の方たちのような地域の目があれば、変質者や犯罪者から地域の子どもを守ることができるのではないか。

僕は地域のつながりを増やせば、地域の目も広がっていくのではないかと思った。したがって、つながりを増やすあいさつは、地域の目を広げることもできるのだ。実際に僕はあいさつによって地域の目が広がる場面を体験した。それは通学中の朝のことだ。僕は毎日ある信号を通って学校へ行く。小学生が登校する時間より少し早い。その信号で毎日朝早く、小学生ぐらいの子が一人で犬を散歩しているのを見かける。そんなある日、自転車に乗って信号待ちをしていたら、その子が突然あいさつをしてくれた。突然で驚いたが結構うれしか

った。今まではその子を気にもせず、ぼーっと信号を待っていたが、あいさつをされてから、毎朝その信号機でその子を見かけるたびに、目をやるようになった。それだけあいさつは相手の心に残ることなのだなと思った。このことで、僕にあいさつをしてくれた子を、僕は気にかけるようになったため、あの子が変質者に連れていかれそうになっても、僕はあいさつをされる前よりいち早く気づけるようになっているはずだ。さらに僕はこのような驚くあいさつでなくても、地域の目が広がった場面に出くわしたこともある。日常生活の中で何気なくあいさつをされたので僕もあいさつを返してその場を去った。そして後日、どこかで見たことのある人とすれ違った。「どこかで絶対会った気がするけどどうしても思い出せない。」と必死に頑張り、ようやく思い出した。「あのときあいさつした人だ。」このように、あいさつは人の心に残る可能性がとても高いのではないか。仮に、全く知らない人が変質者に何かされていることに気が付いたとしても、前に述べた例の人のように、「どこかで見たことがある人」と、「全く見たことのない人」とでは、前者のほうが「あっ、助けないと」という気持ちになれると思う。このようなことからもあいさつにより地域の目を増やすことが防犯に大きく関わることが分かる。

防犯は、地域の人やあいさつなど何気ないところにあふれていると思う。僕も一人の地域の人間として、「地域の目」となって地域の人を守りながら、地域の人の目に守られるといった、地域を守り、地域に守られるという関係が様々な犯罪を防止させるのではないか。